

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：32634

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884060

研究課題名(和文)ハーレム・ルネサンス期におけるコスモポリタニズム思想の展開

研究課題名(英文)Cosmopolitan Poetics of the Harlem Renaissance

## 研究代表者

佐久間 由梨(Sakuma, Yuri)

専修大学・経営学部・講師

研究者番号：90712646

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：アメリカの黒人文学は、人種問題を主題とする文学の総体であると考えられてきた。近年、しかしながら、必ずしも人種問題に言及することのない作品を残してきた黒人作家も少なからず存在しているという事実、新たな関心が向けられ始めている。

本研究は、白人/黒人という人種的二項対立の思考法に必ずしも囚われることのない黒人文学作品の美学的・政治的価値を再検証した。その目的は、黒人文学の主題やジャンルの多様性を示すことにあった。ハーレム・ルネサンス以降の時代に焦点を当て、人種に囚われることのないコスモポリタンなスタイルを持つ作品、登場人物の人種的アイデンティティを明らかにすることのない恋愛詩などを再読した。

研究成果の概要(英文)：It is generally believed that African American literature is largely about race and racial experience. Therefore, critics have traditionally approached African American literature by emphasizing such key themes as racial segregation and violence, the legacies of slavery, and the Great Migration.

Recently, however, critics have started to explore African American texts that do not necessarily address racial issues in either their style or their content, and have instead attempted to explore the cosmopolitan diversity of American experience as represented in works by African Americans. Through close readings of African American works that do not directly address racial issues, this study aims to highlight the diversity of African American literature in the 1920s, focusing specifically on the writers of the Harlem Renaissance and arguing that cosmopolitanism and multiculturalism are important parts of the philosophical foundation of the Harlem Renaissance.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 黒人文学 人種 コスモポリタニズム ハーレム・ルネサンス

### 1. 研究開始当初の背景

奴隷制時代および人種分離政策期に普及した「一滴の血のルール」は、たとえ一滴でも黒人の血が入っているならば、どんなに肌の色が白くとも黒人と分類されるという思考回路を米国人に植え付けた。黒人知識人 W.E.B. デュボイスに従えば、このような 20 世紀のアメリカの問題を「カラーラインの問題」と呼ぶこともできるだろう。

黒人初の芸術文化運動であるハーレム・ルネサンスが開いた 1920 年代以降、黒人作家たちは、カラーラインにより分断された社会を生きる黒人たちの生活、その葛藤や野望を描き出してきた。ハーレム・ルネサンスの立役者として『新しい黒人』(1925)を編集し、近代的な人種像を提示したアラン・ロック、1930 年から 40 年代に『アメリカの息子』(1940)などの作品により急進的黒人像を提示したりチャード・ライト、1960 年から 70 年代にブラック・アーツ・ムーブメントの詩人として黒人美学を提唱したアメリ・バラカなどは、文学により黒人という人種的アイデンティティに明確な輪郭を与えた作家たちの一例だ。

これらの作家の手により、黒人民衆や労働者の生活を描く「人種写実主義」、支配者階級への異議申し立てを行う「抗議小説」、公民権運動以降の新たな人種意識を表明した「ブラック・アーツ・ポエトリー」などが、黒人文学の主流ジャンルとして確立されてきた。

従来の黒人文学批評は、上記に示したような、人種的アイデンティティを明示する文学作品を、黒人文学の代表作とみなす傾向が強かった。黒人文学とは人種を描くジャンルの総体であると考えられてきたのである。

しかし、2000 年代以降の研究は、「黒人文学 = 人種表象」という暗黙の前提を疑問視しはじめている。近年の批評家たちは、多くの黒人作家たちが、必ずしも人種という尺度のみではその美学的・政治的価値を測ることのできぬ、雑多で多様な文学ジャンルに精通してきたことに、改めて注目を向けている。より具体的には、近年の黒人文学批評は、カラーラインの思考法(白人と黒人との単純な二項対立)では捉えきることのできない多文化、多人種、多民族の世界観を描き出すコスモポリタンなスタイルで執筆した黒人作家、サイエンス・フィクション、ロマンス・恋愛詩、ユートピア小説などのジャンルを開拓した黒人作家、登場人物の人種を曖昧にしか表象しないポストモダンな手法へと傾倒した黒人作家などが、少なからず存在してきたことに、光を当ててきた。

### 2. 研究の目的

本研究は、白人と黒人との間に明確な境界線が引かれたかにみえる 1920 年代およびそれ以降の時代において、カラーラインの思考法を超越するような地平を見据えて執筆された黒人文学作品、あるいは、そもそも人種を表象することを意図せずに執筆された黒人文学作品を再考することを目的とした。1 でも述べたように、人種問題を直接的に扱うことのない作品は、従来の黒人文学批評においては、さほど注目されることはなかった。本研究の意義は、必ずしも人種的な主題にこだわることのない作品を再読・再発掘することで、黒人文学の主題、スタイル、ジャンルの多様性を示すことにあった。

特に本研究が注目したのは、Alain Locke のコスモポリタニズム思想に関するエッセイや論考、ハーレム・ルネサンス期に多文化主義的世界を描き出した黒人作家 John Matheus の短編、恋愛詩というジャンルを開拓しつつ、人種差別や性差別から解放されたユートピア的かつコスモポリタンな世界を表わした女性詩人たち(Georgia Douglas Johnson, Angelina Weld Grimké, Carrie Williams Clifford など) 災害時に生みだされる即席かつ雑多な共同体を詩に描き出した Sterling Brown などである。

### 3. 研究の方法

#### (1) マニユスクリプトの調査と分析

本研究の核となる黒人知識人や作家たち(アラン・ロック、ジョージア・ダグラス・ジョンソン、ジョン・マセウス等)の原稿には、いまだ未出版のものも多い。そこで、米国の図書館と連絡を取り、未出版の手書き原稿などを手に入れることから研究を始めた。2013 年の夏以降、アラン・ロックやジョージア・ダグラス・ジョンソンの草稿を保管するハワード大学図書館マニユスクリプト・ディヴィジョンの図書館員の協力のもと、主要な手書き原稿のコピーを入手することができた。

2015 年 12 月には、ワシントン D.C. の議会図書館へ赴き、1 週間ほど資料調査を行った。議事堂図書館は、黒人作家ラルフ・エリソンのアーカイヴ・コレクションをはじめ、日本では得ることのできない黒人作家たちのテキストの宝庫である。

これらの出版済み・未出版のテキストを一念に読み込み、まずはその原稿の内容/形式のレベルにおいて、これらの作家の特性を見出す作業に専念した。

#### (2) 国内学会・シンポジウムでの発表

2013 年 5 月の日本アメリカ文学会東京支部例会、詩の分科会で、ハーレム・ルネサンス期の女性詩人についての発表を行った(「愛、エクスタシー、コスモポリタニズムの詩学——ハーレム・ルネサンスの黒人女性詩人たち」)。

また、2014年6月の日本英文学会関東支部第9回大会のシンポジウム「ユートピア/ディストピア再考——歴史、ジェンダー、共同体」にパネリストとして参加した（『黒人詩、ホモエロティシズム、ユートピア』）。

上記の学会・シンポジウムは、アメリカ文学研究者、イギリス文学研究者とも活発な議論と交流を行う機会となった。

### (3) 学内の研究会・公開講演会での発表

2013年6月の専修大学現文研例会では、「『黒人文学らしさ』についての一考察——ハーレム・ルネサンスの多様な詩学」という題目で、黒人文学のジャンルの多様性について発表し、貴重な意見を同大学の研究者から得ることができた。

2014年6月の専修大学人文科学研究所公開講演会では、アメリカ文学およびアフリカン・アメリカン文学の研究者である荒このみ教授と共に、一般向けの公開講演を行った。2014年11月の専修大学人文科学研究所公開講演会「Jay Rubin 講演会 村上春樹を聴く」では、村上春樹文学の翻訳者であるジェイ・ルービン教授を米国から招き、専修大学の米村みゆき教授とともにパネリストとして一般に講演を行った。

大学内で行われたこれらの研究会・一般向けの講演会では、国内外のアメリカ文学研究者、イギリス文学研究者、日本文学研究者、などと意見交換・交流をする機会を得た。さらに、一般向けの講演会において発表することで、大学外の幅広い年代の聴衆から感想や意見をいただき、大変勉強になった。

## 4. 研究成果

1920年代以降の黒人文学における人種とコスモポリタニズムとの関係性を再考し、論考へとまとめた。主な成果としては(1)アラン・ロックのコスモポリタニズム思想についての論文、(2)ハーレム・ルネサンス期の黒人女性人のコスモポリタニズム・ユートピアにズムについての論文、(3)その他のハーレム・ルネサンス期の作家についての論文、(4)アメリカの黒人文学作品以外の論文、がある。

### (1) アラン・ロックの「コスモポリタニズム」

アラン・ロックは、一般的には1925年に『新しい黒人』編集・出版し、新しい黒人像を提示した知識人としてみなされている。しかし同時に、ロックは、多文化主義を先取りするともいえるコスモポリタニズム思想の理論化を試みた哲学者であった。アラン・ロックがオックスフォード大学に留学中に執筆した「コスモポリタニズム」(1908)という手書き原稿を入手・分析することで、ロックが西洋哲学におけるコスモポリタニズムを、人種的マイノリティーの視点、反植民地主義の視点、反移民排斥運動の視点などから批判的に書き換え、そのオルタナティブとなるような、新

たなコスモポリタニズムを理論化しようとしていたことを明らかにした。

### (2) 黒人女性詩人の恋愛詩

西洋ロマン派の詩学に影響を受けた女性詩人ジョージア・ダグラス・ジョンソン、キャリー・ウィリアムズ・クリフォード、アンジェリーナ・グリムキらの詩を総合的に再読した。ハーレム・ルネサンス期の女性詩人の詩の多くは、人種を直接的に扱うことのないスタイルに特徴づけられる。それゆえ、従来の人種的要素に焦点を当てる文学批評の枠組みにおいては、その美学的・政治的価値が高く評価されることはなかった。

本研究の意義は、これらの女性詩人が、人種的アイデンティティを描くことのない恋愛詩というジャンルを開拓することで、特定の人種に帰属することが強制されることのない、人類愛に基づくコスモポリタンな世界、愛と平等に満ち溢れたユートピア的世界・未来を描こうと試みていた可能性に光を当てたことにある。研究の成果は、論考「愛とエクスタシーの詩学——ハーレム・ルネサンスの黒人女性詩人たち」(『専修大学現代文化研究所』)へと結実した。

### (3) その他のハーレム・ルネサンス期の作家

従来の批評においては、「人種的共同体」とみなされてきた文学表象を、人種、民族、階級、ジェンダーなどの観点から再考することで「コスモポリタンな共同体」として再解釈した。

特に焦点を当てた作品は、ジーン・トゥーマーの『ケーン』、ネラ・ラーセンの『流砂』、スターリング・ブラウンの「マ・レイニー」などである。研究成果を3つの論考として出版した(「“Now/her”——“Nowhere”：即興、共同体、アメリカ黒人文学」[専修大学『人文科学研究所月報』]、*“The Spatio-Temporal Community in Jean Toomer's Cane.”* [津田塾大学『言語文化研究所報』]、*「ブルースと大洪水——ベシー・スミスの『バック・ウォーター・ブルース』とスターリング・ブラウンの『マ・レイニー』* [首都大学東京『メトロポリタン』])。

### (4) 派生的な研究

本研究が焦点を当てる「黒人文学」という範疇にはあてはまることはないが、人種とコスモポリタニズムという主題を、より広い範囲で研究し、発表・出版した。

2014年に *Critical Theatre Review* に発表した論考、*“‘Revolutionary Theatre’ or ‘Syncre-Theatre’: Derek Walcott’s Walker (2002) and the Representations of Temporality”* においては、カリブ海作家デレク・ウォルコ

ットの『ウォーカー』(2002)という作品を、コスモポリタン演劇の一種として再解釈した。他/多なる言語を横断的に上演することで、『ウォーカー』は、アメリカの歴史においてはもっぱら過激なブラック・ナショナリストとしてみなされてきた黒人奴隷制廃止論者デヴィッド・ウォーカーを、カリブやアイルランドの独立運動との関係性のなかで再提示することを試みている。本戯曲は、表面的には、黒人奴隷と白人至上主義者と人種の二項対立を描くように見えるが、実際には、単純な白/黒の弁証法には集約されえない横断性あるいは「群島性」をも上演しようとしている点において、植民地主義の遺産により産み落とされた「融合演劇(Syncre-Theatre)」とも呼ばれうるものである。

2014年の公開講演会では、「村上春樹の描くジャズ——ジョン・コルトレーンの『マイ・フェヴァリット・シングズ』を中心に」という発表を行った。村上春樹文学とジャズとの関係については、これまで多くの批評家が関心を払ってきた。しかし、もともとはアメリカの黒人たちにより生みだされたジャズをめぐる人種性との関連において、村上春樹文学を分析した論考は少ない。本発表では、特に『ノルウェイの森』と『海辺のカフカ』におけるジャズサクソプレイヤー、ジョン・コルトレーン像を通じて、両作品が、異なる方法において、間接的にアメリカの黒人の美学・政治学を反映していることを論じた。

村上春樹文学の翻訳者であり日本文学研究者でもあるジェイ・ルービン氏を招いた講演会において発表することで、「黒人音楽・文学に影響を受けた日本文学」という研究テーマの持つ可能性を再確認することができた。現在、文学が言語や国境の垣根を超えて世界各国で翻訳出版されている。このような状況において、人種や黒人性はいかに、アメリカ国外において受容・翻訳されるのだろうか。将来、より深く研究していきたいテーマ群を新たに見出したことは、大きな成果であったと感じている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

佐久間由梨「ブルースと大洪水——ベシー・スミスの『バック・ウォーター・ブルース』とスターリング・ブラウンの『マ・レイニー』」首都大学東京『メトロポリタン』57(2015): 53-62. 査読無

Yuri Sakuma. “The Spatio-Temporal Community in Jean Toomer’s *Cane*.” 津田塾大学『言語文化研究所報』29(2014): 6-17. 査読無

Yuri Sakuma. “‘Revolutionary Theatre’ or ‘Syncre-Theatre’: Derek Walcott’s *Walker* (2002) and the Representations of Temporality.” *Comparative Theatre Review* 13.1 (2014): 31-54. 査読有

佐久間由梨「愛とエクスタシーの詩学——ハーレム・ルネサンスの黒人女性詩人たち」専修大学『専修大学現代文化研究所』90(2014): 71-87. 査読無

佐久間由梨「“Now/her”——“Nowhere”：即興、共同体、アメリカ黒人文学」専修大学『人文科学研究月報』12(2013): 1-16. 査読無

[学会発表](計5件)

佐久間由梨「村上春樹の描くジャズ——ジョン・コルトレーンの『マイ・フェヴァリット・シングズ』を中心に」専修大学人文科学研究所公開講演会「Jay Rubin講演会 村上春樹を聴く」2014年11月8日、専修大学(神奈川県川崎市)

佐久間由梨「アメリカ黒人文学における災害と絆」専修大学人文科学研究所公開講演会、2014年6月27日、専修大学(神奈川県川崎市)

佐久間由梨「黒人詩、ホモエロティシズム、ユートピア」(英米文学部門シンポジウム「ユートピア/ディストピア再考——歴史、ジェンダー、共同体」)、日本英文学会関東支部第9回大会、2014年6月21日、成城大学(東京都世田谷区成城)

佐久間由梨「『黒人文学らしさ』についての一考察——ハーレム・ルネサンスの多様な詩学」専修大学現文研究所例会、2013年6月21日、専修大学(神奈川県川崎市)

佐久間由梨「愛、エクスタシー、コスモポリタニズムの詩学——ハーレム・ルネサンスの黒人女性詩人たち」日本アメリカ文学会東京支部5月例会、2013年5月19日、慶應大学(東京都港区三田)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

佐久間 由梨 (Sakuma Yuri)

専修大学 経営学部 講師

研究者番号: 90712646